

青森県立郷土館企画展

昭和 家電 パラダイス

ガイド
ブック

特集

昭和中期の暮らしを彩った家電製品
あじわう+くつろぐ+たのしむ
3つの生活シーンから紹介

目録
青森県内家電所有率グラフ (p.8)
会場内 みどころマップ (表紙裏)

高度成長期と呼ばれる昭和30年以降、ひとひとの暮らしは大きく変わりました。その背景のひとつに、家庭用電気製品の急速な普及と発展があります。この時代、豊かさや便利さを追求する世の中の流れに乗って、炊飯器やトースター、洗濯機といったさまざま家電の開発や改良が進みました。それは戦前のような単なる電化を超えて、自動化を実現するものでした。家事労働の省力化を促し、新たな習慣を創造する夢の道具は、食事や睡眠といった基本的な生活のいとなみから、娯楽や消費のスタイルまでをも変えてゆく力を持つていました。当時の家電には、変わりゆく暮らしのありさまと人々が理想として描いた生活像が反映されています。今回の展示が、メーカーや消費者が家電製品に向けていた、希望に満ちたまなざしを再発見するきっかけ

ごはん派?



▲おかず2品に汁物1品を同時に作ることができる自動式炊飯器(東芝RC-10H+分割内鍋, 昭和35年)。素材により火が通る時間が異なるので、使いこなすには工夫も必要だった(『暮らしの手帖』『家の光』などの批評より)。

青森県の農村部では、長らく炊飯は炉に吊るした鍋で行われてきた。鍋は混炊や粥といった米の節約を意図した炊き方に適していた。白飯が主食といえるようになるのは戦後で、炊飯には昭和30年代になると薪ストーブが、その後次第にガス炊飯器や電気炊飯器¹⁾が用いられるようになった。つまり本県での「飯炊きの近代化」は、戦後の一般的な生活改善の主題であった「カマド」(改良竈)の導入を飛び越えておこなわれたのである。本県に隣接する秋田県能代市でも同様の状況であった²⁾。

統計をみると、昭和30年代における本県の炊飯器の普及率は、宮城県に次いで2位。30年代全体をみわたしても、青森を除く東北5県の平均値よりも常に高い。他の電化製品にはみられない、本県の特徴である。

▶「非自動式の炊飯器(上) / 三菱N-1 昭和29年、松下 / 軽便炊事器IEC-21 昭和29年。東芝の自動式炊飯器発売(昭和30年以前にも、電気炊飯器はさかんに開発されていた)。



▶『東芝お料理集』より、分割鍋を使った調理の一例(写真は再現)。七分粥と五目飯、マッシュポテトとパンケーキの4品。幼児のいる家庭では、分割鍋がご飯の炊き分けに便利であるということを示す。



▲セパレート式炊飯器(日立RD-620, 昭和37年,) 電気コンロとしても使用でき、別鍋を乗せて汁物の調理が可能。付加価値を求め、各社とも多機能化が進んだ。



▼料理ポット(東芝HPC-401, 昭和40年)一人分の炊飯やラーメン、ゆで卵の調理が可能。「個食」の時代を象徴。



▶透視型自動炊飯器(SR-18S+立体なべ, 松下, 鍋: 昭和35年, 本体: 昭和36年) ふたの天窓から炊飯の状況を確認できる。香港では、炊き込みご飯をつくるとき、炊飯の途中で具を入れる。そのタイミングを見るために窓を付けたのがはじまり。(中野嘉子ほか2005『同じ釜の飯』)別売の「立体なべ」を取り付けると、炊飯の際に、汁物やおかずを同時に調理でき、煮え具合の確認ができる。



▲フタが透明で中が見える炊飯器は、東芝からも。(東芝RC-10HG, 昭和30年代)



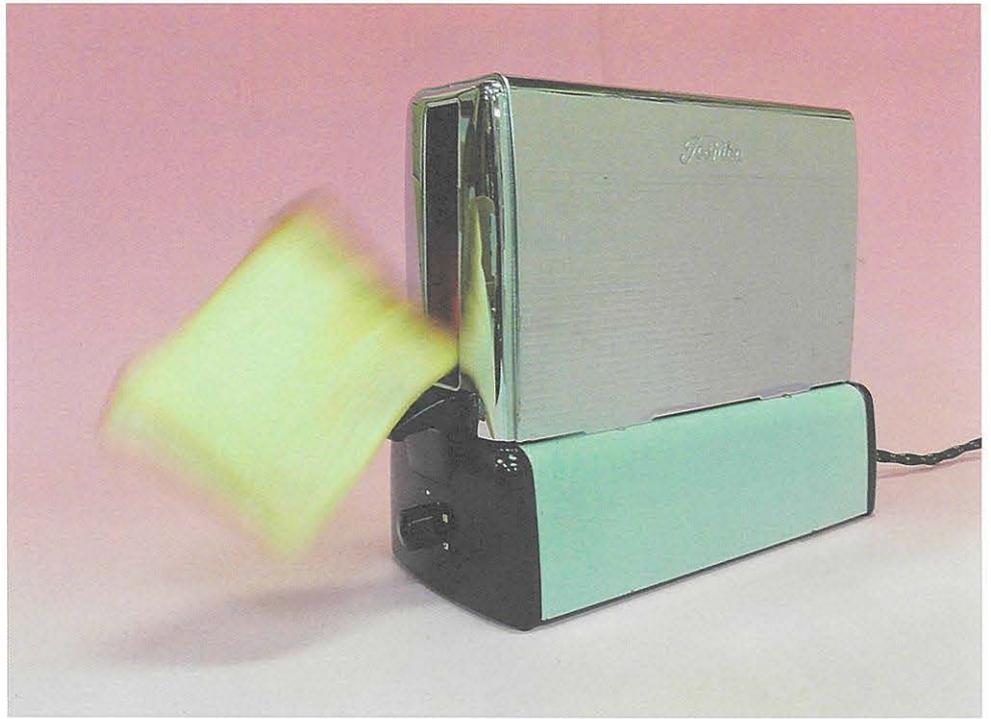
1)メーカーによって「電気釜」「炊飯器」など呼称が異なりますが、ここでは「炊飯器」で統一しました。
2)能代市史編さん委員会編2004『能代市史』特別編・民俗p.167

パン派?

昭和35年以降、青森ではパンの消費額が増加した。昭和39年には東北地方で1位となり、昭和43年には全国で6位となった。大都市でも西洋文化の流入口でもなかった青森で、なぜパン食が盛んになったのだろうか。

パン食の伸びを支えた大きな要因は農村消費だったと言われる³⁾。県内で昭和40年に行われた調査でも、農作業の間食として春秋の農繁期の利用が盛んであったことが示されており⁴⁾、青森を代表する製パン会社・工藤パンの初代社長も農繁期の忙しさを語っている⁵⁾。

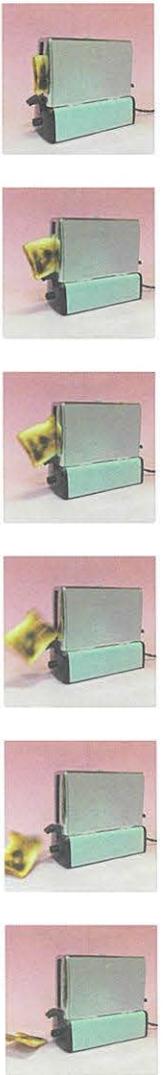
当館の調べでは、県民がトースターをはじめ購入した最盛期は昭和35~45年頃。東北電力の統計でも、30年代半ばのトースターの普及率は東北地方で2位。パン食が盛んになった時期とおよそ合致している。



▲パンが横移動して自動的にトーストされる「ワーキング式トースター」(WT-2, 東芝, 昭和34年)。ミシンの布送り機構と同じ原理でパンが移動する。移動時間=加熱時間(タイマー)とした画期的アイデア。



▲オープン式トースター(東芝エコー, 昭和38年)日本初のオープン式トースター。ロールパンなどもトーストができるようになった。製造は谷田製作所(現株式会社タニタ)。



▼ターンオーバー式トースター(日立TT-402, 昭和30年代)開閉する動作に連動してパンがひっくり返る。



ロングトースター「モーニング」(早川KB-609, 昭和40年)オープン式やロング式は、パンのサイズの変化や形の多様化を反映。



▲全自動トースター(日立TA-650, 昭和40年)パンを投入口にのせると、すべてを自動でおこなう。



▲多機能トースター「スナック3」(東芝HTS-62, 昭和39年)トースト、ミルク、目玉焼きの3品を同時に調理できる。「男の一人暮らしにこんな物が欲しいとの思いつきを開発担当に売り込み、そのまま商品化された」(磯貝恵三ほか2000『プロダクトデザインの広がり』pp.279-280)。当時は「デザイナーの発想がそのまま商品化されることの多かった(中略)トライアンドエラーの時代」(同書)であった。

3) 森宏ほか 1971『パンの消費動向と企業の対応』p.154

4) 弘前中央高校 1965『津州』第十号 p.51

5) 東奥日報 1975.9.10 朝刊「あすを拓くこの企業 工藤パン」



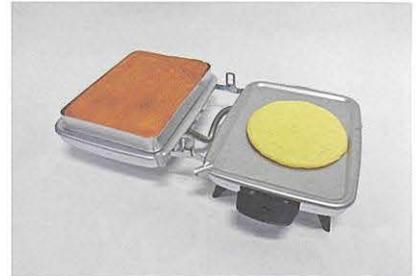
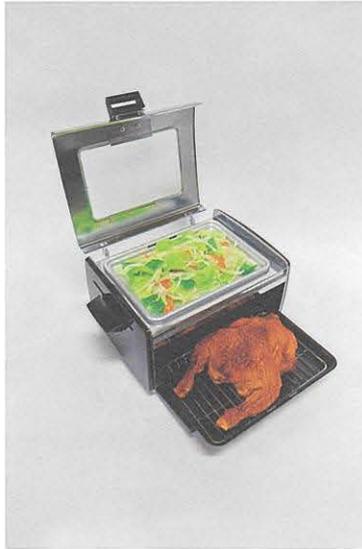
▲電気コンロ(日立HS-630,昭和35年)形態が機能に従属する時代から、形態と機能が美しく調和する時代へ。両者の緊張感が感じられる洗練されたフォルム。

昭和31年に始まった料理番組は次第に数を増やし、30年代半ばにはテレビ料理ブームが起きた。番組を通じて「家庭料理」は一層拡充されてゆき¹⁾、調理家電に対する注目も高まっていった。卵をゆでるための家電、天ぷらを揚げるための家電、缶詰を開けるための家電、かつお節を削るための家電など、特定の作業に特化した調理家電が求められるようになった。



▲電気フライパン(東芝のまん,昭和31年)テーブルグリルにハンドルのついたもの。楽しく卓上で調理ができるとうたう。

▼キッチンロースター(早川KF-657,昭和30年代)上はホットプレート、下はオープンとして使用できて合理的。ファインダーで焼け具合の確認が可能。機能の分化の一方で、2in1, 3 in1などの多機能化も進んだ。



▲テーブルグリル(東芝TG-61,昭和36年)2枚のプレートで、上下から挟んで加熱することも、開いて2種類の料理を作ることできる。付属の四角い枠を使えば、ケーキも焼けるという。ただし「ややホットケーキ式になりますが、味でカバーして下さい」[取説]とのこと。



▶フィッシュユグリン(東芝FG-606,昭和37年)通称「さんま焼き器」。長い魚も焼けるロングタイプ。天火式で汚れにくい。

▶電気カン切り(東芝CK-31A,昭和36年)わずか数秒で開缶できる。発売の昭和36年は、青森県缶詰協会の発足の年。水産缶詰は、この頃を境に手詰めから機械詰めへと移行し、生産性が大幅に向上した。果実缶詰も、輸入の自由化や、日魯漁業弘前工場でのりんご缶詰の生産開始など、生産と流通が一層盛んになった頃である。缶詰の利用機会の増加に呼応して登場した家電であるともいえる。

▲キッチンロースター(早川KF-654,昭和35年)フライパン、ロースター、コンロの3通りに使える「万能型」。



▲電気天火(東芝HGR-81,昭和38年)



▲ホットプレート(松下NF-66,昭和35年)

1) 村瀬敬子 2005『冷たいおいしさの誕生』pp.201-204, 同 2016『高度成長期の料理番組』(国立歴史民俗博物館編『歴博』第196号「高度成長と食生活の変化」) pp.2-5)

これぞ電化

あるいはメーカーによって需要が演出されていった。

折しも国民の所得が伸び、消費者の経済力に余裕が生まれていたころ。さまざまな道具が電気によって自動化され、労働が家電によって代替されることが生活の豊かさであると考えていた人々は、新しい暮らしへの夢を描きながらこれらの家電を手にしたに違いない。



▲電気酒かん器(東芝SW-601, 昭和34年)
45℃から65℃まで好みの温度に温められる。

▼銚子保温器(東芝, 昭和30年代) 徳利袴。



▼自動洗米機(早川EM-374, 昭和34年) 注水しながら羽根を回転させて米をとぐ。ときぎ水はオーバーフロー。羽根を変えるとフードミキサーとしても使用できる。



▲電気やかん(東芝PL-601, 昭和33年) やかんの電化。電気ポットと構造は同じだが、形と容量の大きさに特徴がみられる。

▶電気ポット(松下NC-33, 昭和35年)
温度調節機能により、赤ちゃんのミルクからゆで卵、酒かんまでいろいろ使える。



▼タイマー(早川KT-682, 昭和35年) 洗米機、炊飯器との組み合わせで、飯炊きのオートメ化に近づいた。



▲ゆで卵器(東芝BC-301, 昭和34年)
ゆで加減もお好み次第、スイッチひとつで5個までゆでられる。温泉卵用も(東芝BC-501, 昭和37年)▶



▲ジューサー(東芝JC-25A, 昭和37年)
昭和36年発行の『青汁の効用』(遠藤仁郎著)は、ジューサーの引き金になった。青森県では、ミキサーやジューサーが家庭でイモノハナでんぶんを取る工程に用いられた。



▲クリームフリーザー(松下MF-7K, 昭和30年代) 家庭用アイスクリーム製造器。

▲電気なべ(三菱NB-2, 昭和30年代)





▲電気扇風機「風てまり」(日立B-445,昭和44年)
てまりのように本体を転がして、風向を変えることができる。

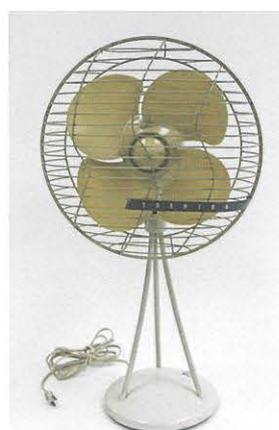


▲冷風換気扇▼
(上: 東芝CVF-2,下: CVF-3A,ともに昭和36年)
水を含んだスクリーンに空気を通し、打ち水の原理(気化熱)で涼風を送るもの。

▶照明付き扇風機(東芝PA-15A「あんどん型」)は、蚊帳の中での使用がおすすめ「取説より」。



▲電気扇風機「ポルカ」
(日立M-6021A(日立,昭和30年代)前と後の双方向に風向きを切り替えることができる。



▲スタンド型扇風機
(東芝,昭和32年)
台座がロータリー式で回転。



▼就寝灯(松下F-657,昭和30年代)

▶蛍光灯スタンド(NEC OC-2101,昭和30年代)サークラインを縦に使ったユニークなデザイン。



▲蛍光灯スタンド
(早川SH-11B,昭和33年)
「お嬢様なら本を置く代わりにフランス人形を置いたり、姫鏡台をのせて」使用できるとうたう。本立て側面の鉄棒には手紙を差し込める仕様。

▶蛍光灯スタンド
(松下F-1083,昭和30年代)
チューリップの花弁の中に豆球が仕込まれている。



1)三浦貞栄治「青森県の火の民俗」(和田ほか1984『北海道・東北地方の火の民俗』P.41)

冬はあたたかく ※メーカーの広告から

座は石油ストーブ」²⁾の時代。薪炭の需要が減り、石油・ガスが爆発的に増加し、電気暖房器具も2～3割の伸びたと報じられる。確かに統計でも昭和34年と昭和39年を比較すると電気ストーブは1.6倍、ガスのストーブは3.9倍の伸び。しかし薪や石炭などの従来式ストーブの減少は1割程度で、未だ普及率は7割を超えていた。根強い人気の薪炭ストーブ。北国青森では「実際の火」の暖かさが好まれたようだ。



▲電気ストーブ(日立 HLV-2, 昭和30年)「月型」と称されたモダンなデザイン。心もあたたまる。



▲電気コンロ・ストーブ兼用型(ナショナルNK-621, 昭和36年) 2通りに使え、持ち運びにも便利。



▲電気てあぶり(東芝SHK-35, 昭和34年)▶ 灰皿式になっており、暖を採りながら喫煙を楽しむことができる。

▲電気火鉢(松下DH-61, 昭和30年代) 上部に加湿用の水盆が付属する。



▲電気敷布(松下, 昭和30年代)

▼やぐら式電気こたゝ(東芝KYT-32, 昭和35年) 熱源を下から上に持つてくるという逆転の発想。東芝が日本ではじめて商品化した。

▲電気クッション(東芝CCK-41, 昭和30年代) 戦前は粗悪品が出回り、火災の原因ともなった。



▲電気火鉢(東芝SRT-611 スタンド型, 昭和35年) 三本足の高さは調節可能。立式の生活スタイルにも対応した。



▲電気スリッパ(足温器)(松下, 昭和30年代)



▲電気魔法あんか(東芝CAN-505, 昭和36年) 保温蓄熱材としてナフタレンを用いている。融解時に発する熱を利用。



2) 「東奥日報」1961年11月28日夕刊(『青森県史』資料編近代6参照)

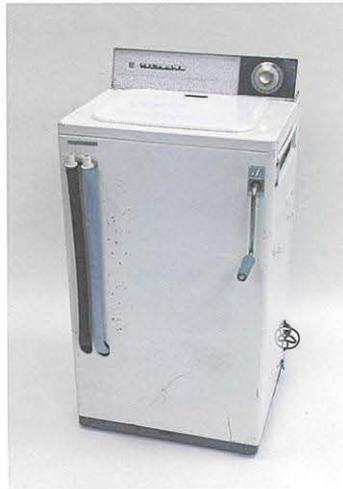
家電と「アメリカさん」

家事のなかでもとりわけ苦勞の多かった洗濯。「手で、アガタグレで(アカギレになって)まって血流れてくるよに洗ったんだ。毎日毎日」(東北町上北, 昭和2年生, 女性)。

そんな主婦を助けたのが電気洗濯機だった。戦後、進駐軍による大量受注により、家電の製造は「マル進景気」に沸いた。進駐軍の要求を満たす高品質な製品づくりが、その後の技術的発展の基礎になったと言われる¹⁾。洗濯機もアメリカに倣って当初は「攪拌式」が生産された。実用であることから、電気洗濯機の普及率は、全国的にみても他の白物家電に比べて高かった。昭和30年代の青森県では、白物家電の中では炊飯器に次いで普及率が高く、昭和40年以降はトップで推移している。

家電の普及と米軍との関係についてはこんな証言もある。「三沢基地に来てるアメリカさんたちのところへ働きに行っ、こんなの便利だよって情報が入ってくるから、電気製品が意外と早くね、この辺では普及したって感じがなあ」(東北町上北, 昭和7年生, 女性)。

電気洗濯機(日立SH-JT60, 昭和44年)▶
日立が開発した「ジェット式」洗濯機。パルセータの揉み洗いと、ジェット水流の振り洗いの組み合わせで、布地に優しく、かつ洗い上がりも早いことが特長。



◀ふとん乾燥機 [当館蔵]
(東芝MD-500, 昭和49年)
世界初の家庭用ふとん乾燥機。津軽地方の家庭で使用されていたもの。家事の負担軽減と、冷え性の家族のために購入した。「よかったですよ。天気に関係なく干せるし、温かくなるし。ただ、大きくていちいち布団持って来るのが面倒だはんだの」(五所川原市, 昭和6年生まれ・女性)。当時の開発者も「大きくて収納場所に困るという理由からあまり売れなかった」と語る。



▲電気洗濯機(松下N-10, 昭和30年代)噴流式洗濯機。セレクターの切り替えにより、水流の強弱を変えられるほか、パルセータが反転するので、布地のよじれを軽減できる。



▲アイロン「ポータロン」
(東芝EI-102, 昭和36年)
プラスチックの筐体の中に本体を収納できる。コンパクトなので旅行にも。



▲アイロン(東洋プレス工業, 昭和20年代)「亡き父が鉄道員になり、研修に行った東京で購入したものです。制服にアイロンがけをしたそうです。結婚してからは母も使いました。スチームアイロンを購入してからも、昭和50年代まで使い続けました」(青森市, 50代女性)



▲電気はさみ「クイッキー」
(早川EV-990, 昭和36年)
「裁縫界のヌーベルバーグ」との触れ込みで登場。片方の刃のバイブレーションによって切れる。



▲電気掃除機
(東芝VC-30A, 昭和36年)
コードリール機能が付いておらず、ハンドル部分に巻き付けて収納する仕組み。本体は筒状(シリンドラー型)の金属製。

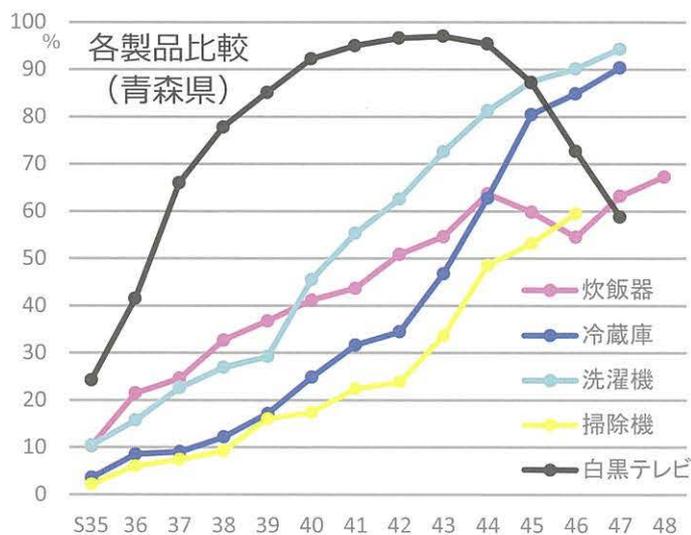
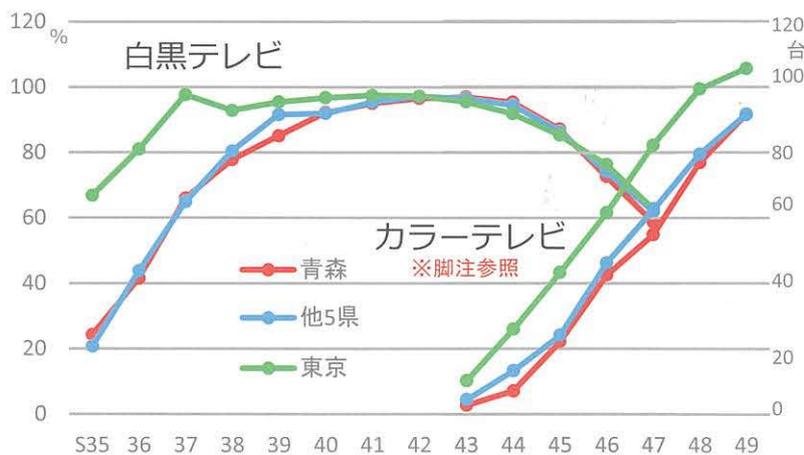
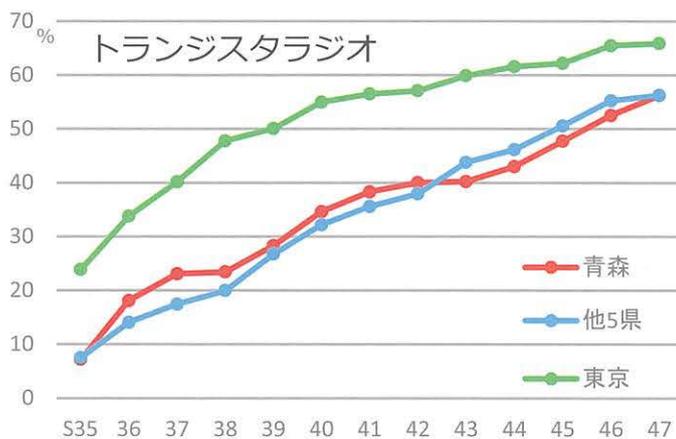
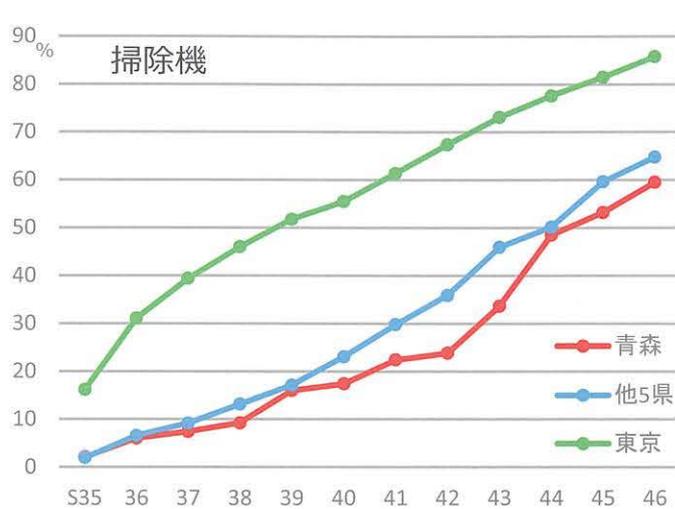
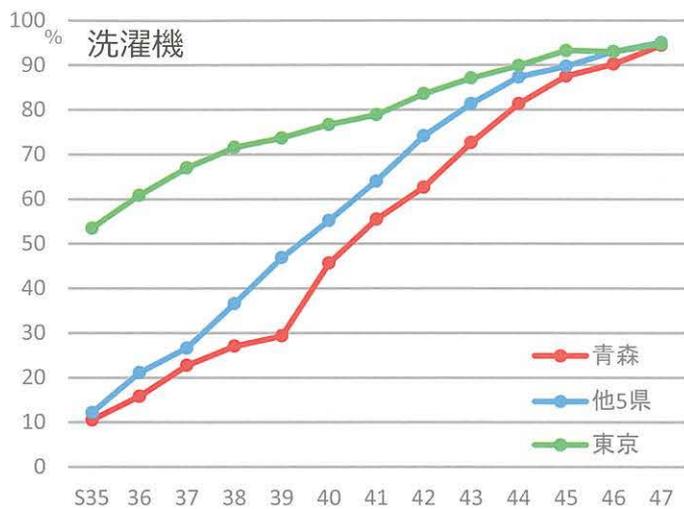
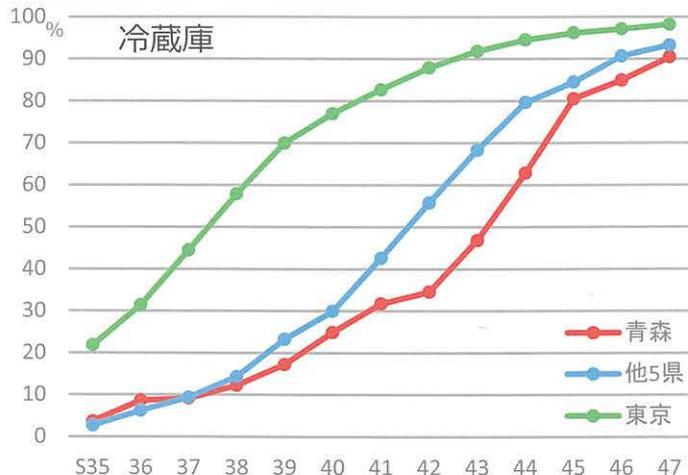
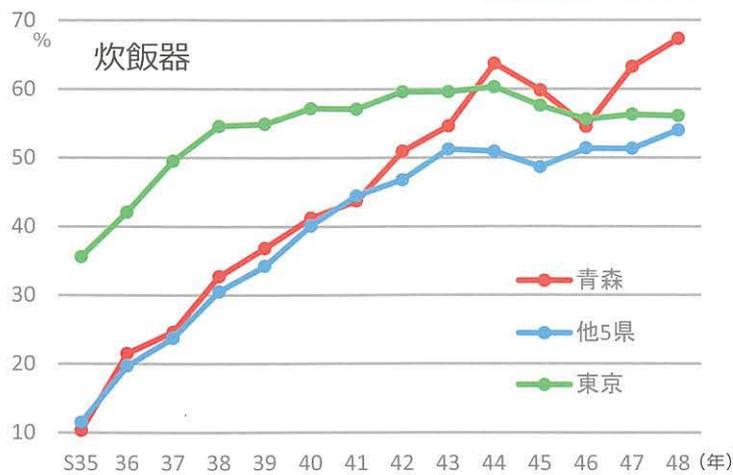


▲電気掃除機「太郎」
(三洋SC-3000, 昭和43年)
世界初のカセット式集塵パック付き掃除機。「自動ちり落とし」「カプセル式」など、当時はゴミ処理機能についての工夫が各社ともにみられた。

▲電気掃除機「ハイクリーンD」
(松下MC-1000C, 昭和40年)
日本初の全プラスチック掃除機。プラスチックはより自由なデザインを可能にした。国産掃除機として初のGマーク商品。

1) 大西正幸 2008『電気洗濯機 100年の歴史』pp.44-45, 佐竹博 2009『日本の家電製品』p.31

資料 主な家電製品の所有率 (青森県/青森を除く東北5県の平均/東京都)



青森県では、「炊飯器」と「トランジスタラジオ」の所有率が比較的高めだったんだね。製品間では「洗濯機」の所有率が他に比べて目立っているよ。



「家電バラダイス」
マスコットキャラクター
スナツくん

資料出所：財団法人中央調査社 各年とも9月と3月の平均 (例) 1960年のデータは、1960年9月と翌年3月のデータの平均
上記出典：『民力』(1962-1974)の各年次版)朝日新聞社
品目によって1972年以降のデータを欠く。

注)カラーテレビについては、「所有率」ではなく、「100世帯あたりの保有台数」である。白黒テレビに対するカラーテレビの普及のおおまかな傾向をイメージするための材料として、同じグラフ上に重ねあわせた。



▲ヘアー 드라이ヤー(東芝 THD-21, 昭和34年) スタンドに立てることで、手に持たずに使用することができる。製品に対する作り手の愛情が伝わってくるようなデザイン。

昭和32年、北海道の函館山に送信所が開設され、海峡を挟んで向かい合う本県の一部ではそのおこぼれに与る形でテレビ放送を楽しめるようになった。ただし、下北地方はともかく青森市内では、できるだけ高く北向きにアンテナを掲げなければ受信できなかったという¹⁾。青森に地域局が開局するのはその2年後である。この頃は豪華さを競い合うように、ステレオプレーヤー付き、リモコン付き、時計付きなど、娯楽のシンボルに相応しい付加機能満載の豪華なテレビが登場した。

生活にゆとりが出てくると、その余裕は自己へも向けられるようになった。現在の衛生観や身体観につながる感覚は昭和30年代なかばころから形成され始めたといわれる²⁾。電気マッサージャーや電気カガミ、赤外線美容ライトなどの工業製品は、美や健康に対する意識に影響を与えた。電気こたつですら「美容と健康に効果あり」と宣伝された。



▲赤外線美容ライト「ピオラ」(松下RE502, 昭和30年代) 新陳代謝を盛んにし、美肌や美顔に効果があるとされた。



▶パイプレーター (松下SV-1, 昭和30年代) 疲労回復や健康増進に効果があるとされた。



▲電気蚊取り器「パイプライター」(フマキラー、昭和43年) 昭和39年に日本で公開されたミロのヴェイナス。その美しさ？豆球が点灯し、常夜灯にもなる。



▲赤外線健康イス(松下RH-9000, 昭和40年代) 肛門疾患や腰の冷えに効果があるとされた。



家庭や外出時の
お化粧に…… 働く女性の
お化粧に…… パーティーや
夜の化粧に……

▲電気カガミ「メーキャップミラー」(三洋MM-40, 昭和40年代) シーンにあわせ、白・赤・緑の三色の照明を選べる。

▼テープレコーダー(松下RQ-703D, 昭和37年) 青森市の男性(昭和12年生)が使っていたもの。知人の家でレコードを録音し、洋楽を楽しんだ。昭和30年代なかばから、オーディオ機器は応接間や居間から個室へ移る。音楽の再生は個人の楽しみになっていった。



▲時計・リモコン付テレビ「パレード」(早川TD-80, 昭和33年) 有線リモコンの長さは5m。画面左下にはアナログ時計が付属。



▲ステレオシステム付きテレビ(早川TD-82, 昭和35年)「ステレビジョン」ステレオプレーヤー体型の真空管テレビ。一般的なテレビとステレオを別々に買えば12万円のところ、84,800円。置き場所も省ける。「場所も費用も2台分よりはるかに経済的」(広告)であることがウリだった。



▲カラースコープ(アサヒ産業、昭和30年代) 画面に取り付け、白黒テレビをカラー化する器具。説明書は「目と神経を完全に保護する」と謳っている。



1)「写真で見るとあおりあとのとき(第94回)」東奥日報2012年6月7日朝刊
2)青木隆浩2015「衛生観と身体観の変遷」(国立歴史民俗博物館ほか編「民俗表象の現在 - 博物館型研究統合の視座から -」pp.111-152)

家電 宇宙時代

ソ連が人工衛星(スプートニク1号)を軌道に乗せることに世界で初めて成功したのが昭和32年。続いて4ヶ月後にアメリカが成功(エクスポーラ)。昭和36年には、ソ連が世界初の有人宇宙飛行を実現した(ボストーク)。昭和30年代は本格的な宇宙開発が幕を開けた時代だった。

それ以前からも、家電の意匠には宇宙へのあこがれが投影されていたが、「人工衛星型」「ロケット型」などの商品が登場するのは、スプートニクが話題になってからだ。

- 昭和29年 月型 電気ストーブ
- 昭和29年 半月型 照明スタンド
- 昭和30年 原子炉型 ミキサー
- 昭和31年 水星型 ラジオ
- ………スプートニク打ち上げ………
- 昭和32年 人工衛星型 洗濯機
- 昭和33年 ロケット型 枕元照明



▲「原子力時代を象徴するデザイン」(日立ニュース)と紹介されるミキサー(日立MJ1,昭和30年)。発売の昭和30年には原子力基本法が成立。日本初の商業用原子力発電所である東海原子力発電所で導入された炭酸ガス冷却炉は「球形」である(着工は昭和35年)。このミキサーは、球形の原子炉をモチーフにしたものか。



▲「水星型」真空管ラジオ(東芝,昭和31年)。球体の底面にスピーカーが下向きに設置されており、360°全方位に音がひろがる。愛称は「マーキュリー」(水星)。



▲「月型」ストーブ(左から,日立 HVL,HVL2,VH-64,VH-118,昭和29年~32年)

谷田製作所(現 タニタ)が製造し、日立ブランドで発売された製品。谷田製作所は家庭器具総合メーカーとして優れた電気器具を大手メーカーに納入していた。



▲「半月型」明視スタンド(松下F1080,昭和31年) ラジオ雑音防止機能付。



▲「人工衛星型」膨張圧力式洗濯機(林製作所,昭和32年)

球体の内部に衣類を入れて湯を注ぎ、ふたを閉じて軽く回転させる。内部の空圧が高まったところでふたを開けると、瞬間的に圧力が低下し、汚れが繊維から剥がれるという原理。取扱説明書は「わずか10秒で洗える」とうたう。

県内でも、使ったという証言を聞くことは多い。発売から6年あまりで30万台を売り上げたヒット商品。電気洗濯機に比べれば手頃な価格も魅力だった。

▼「ロケット型」就寝灯(早川6 S-801,昭和33年)枕元用の照明。「壁掛けにもなる便利な設計」で、「ロケット型スタンド」として発売された。



家電パラダイス

そのカデんの園へようこそ



珍しい「電極式」パン焼き器
卵ゆで器
炊飯器

スナックくん



ユニークな原子炉型!?
ミキサー

ダイニングキッチン
デコラのテーブルと
ステンレス流し台
◆当時のローカル番組
組を見よう!

1度に3品つく
れるトースター
「スナック3」



世界初
家庭用ふとん
乾燥機

人工衛星型などの
「宇宙家電」



食卓にいつも花を……
花柄の家電
名付けて「花電（かでん）」



日本初
オールプラスチック
掃除機
世界初
カセット集塵式掃除機

掃除・洗濯

くつろぐ

冷暖房

◆茶の間でこたつに
あたるう!
やぐら式電気こたつ

素材

かたち

模様

電気スリッパ
電気クッション
面白い採暖具はココ

球体型のユニークな
扇風機「風てまり」な



世界初
家庭用もちつき機

細分化

副食の調理

複合化



世界初
家庭用洗米機

あじわう

トースター

テレビジョン

みんなの「家電」

照明



普段は置き物、
非常時は明かり
「こけし型」
懐中電灯



トースターが
散歩?
ウォーキング式
トースター

主食の調理



わたしの「個電」

美容・健康・学習

青森の先人ゆかりの家電
沢田教一(ラジオ)
郡場寛(ラジオ)
棟方志功(テレビ※)
※テレビコーナーに展示



ここでひとやすみ
版画家・棟方志功は、
双眼鏡を使ってテレビ
を見たとか。
◆双眼鏡で、志功の
テレビを見てみよう!

炊飯器

昭和30年代の青森へようこそ
オープニングシアター

11チャンネルの
貴重なテレビ
(中泊町博物館蔵)

日立市の「家電菓子」
銘菓せんぷうき、モーター最中……

わたしと家電
◆みなさんからのメッセージ
お待ちしております!



入口

出口

ご観覧記念スタンプ

平成 年 月 日

ご協力いただいた方々 (敬称略・順不同)

(企業・機関)

- 青森放送株式会社
- 株式会社岩崎 青森営業所
- 株式会社タニタ・タニタ博物館
- 株式会社東芝・東芝未来科学館
- 株式会社日立製作所・日立アプライアンス株式会社
- 株式会社東奥日報社
- 株式会社LIXILグループ
- 国立研究開発法人 科学技術振興機構
- シャープ株式会社・シャープミュージアム
- 周防大島文化交流センター
- 象印マホービン株式会社・まほうびん記念館
- 道具学会・家電研究会
- 東北電力株式会社 むつ営業所
- 東北歴史博物館
- 中泊町博物館
- 日本原燃株式会社 青森総合本部
- 八戸市南郷歴史民俗資料館
- パナソニック株式会社・パナソニックミュージアム 松下幸之助歴史館
- フマキラー株式会社
- 三木鶏郎企画研究所
- 有限会社ステージクラフト
- 青森県教育庁生涯学習課
- 青森県総合社会教育センター
- 青森県立図書館

(個人)

- 磯貝 恵三
- 大西 正幸
- 加藤 淳一
- 菊地 アイ
- 工藤恵美子
- 櫻庭 忠三
- 相馬 信吉
- 高橋 豊
- 竹村 俊哉
- 對馬恵美子
- 西野 博美
- 山田 トク
- 藤田 教子
- 山谷 聖也
- 和田 正彦

- ・この冊子に掲載されている資料は、出品物のうちの一部です。
- ・冊子の構成は実際の展示と異なります。
- ・所蔵先について特に記載のないものは個人蔵です。
- ・参考、引用文献については各ページ内に記載しました。
- ・発売年等については、各メーカーおよび各企業博物館からご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

平成28年度 企画展「昭和家電パラダイス」
会期：2016年11月18日(金)～2017年1月15日(日)
主催：青森県立郷土館 共催：東奥日報社

ガイドブック「昭和家電パラダイス」
2016年11月18日発行
編集：青森県立郷土館 (編集・執筆担当 増田公寧)
発行：総合博物館 青森県立郷土館 (青森市本町二丁目8-14)
印刷：ワタナベサービス株式会社

(非売品)